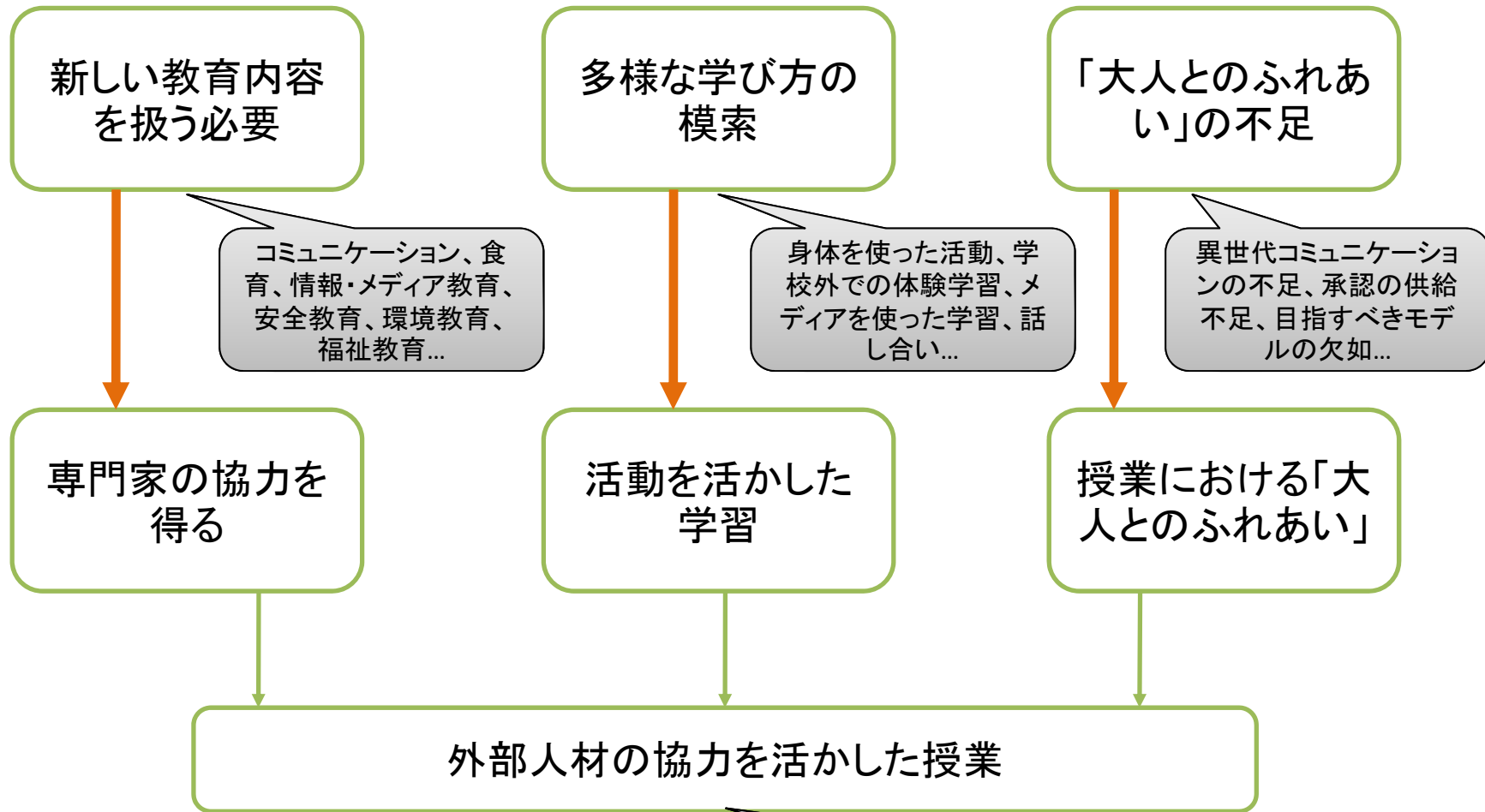


3. 外部との連携



外部人材の協力が
なぜ必要か？

ゲストを招く、「依頼」をしてもらう、見学させてもらう、一緒に活動する、活動の成果を評価してもらう...

子どもの環境の変化

地域共同体の崩壊と「大人とのふれあい」の消滅

(サザエさん、ちびまる子ちゃん、クレヨンしんちゃん 神谷明宏氏による)

「新人類世代」(1960~65年生まれ)が親に

「個人の経済的豊かさ=幸福」という価値観 → 「利他的な夢」が必要

幼い頃から電子メディアに接触してきた世代が親に

「世間」の崩壊→しつけが困難に

消費者として扱われる子ども

高度情報社会は、子どもが受け身で情報を受け取る社会

買い物でも、「子ども」としてでなく「客」として扱われる



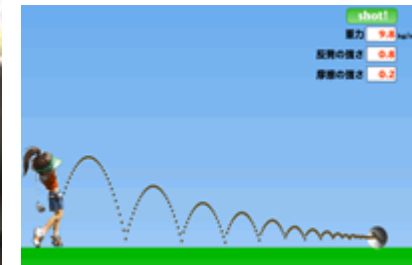
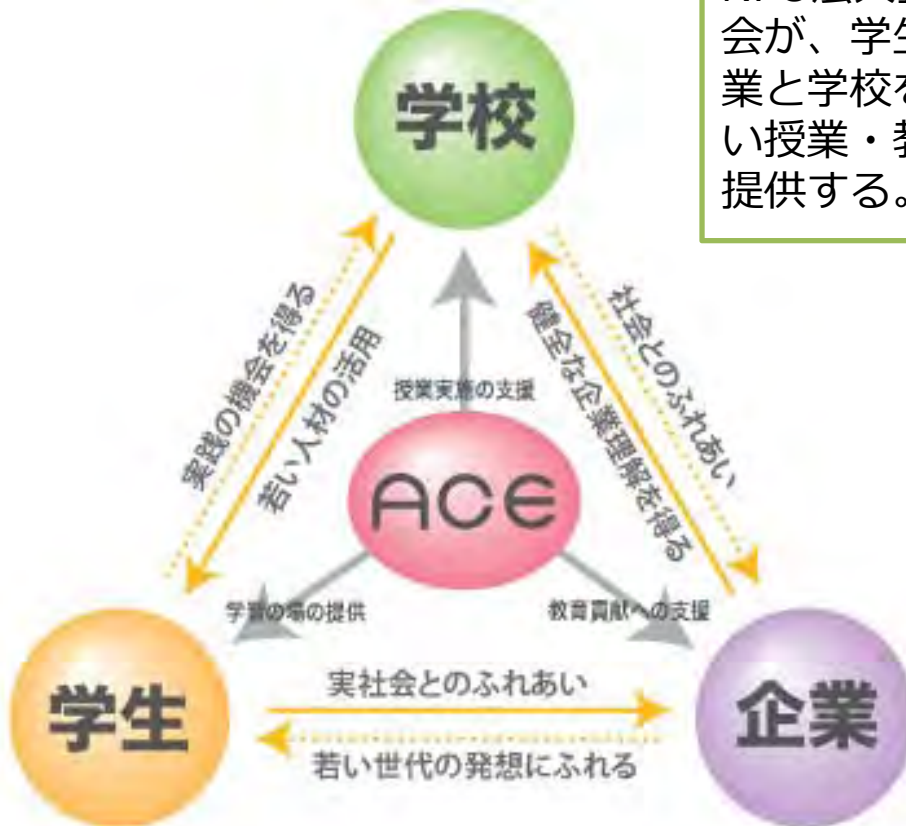
社会とのかかわり方を再考することが必要

学校×企業・NPO・地域

「大人とのふれあい」を提供する



NPO法人企業教育研究会が、学生の力で、企業と学校を結び、新しい授業・教材を学校に提供する。



誰もが教育に貢献する社会



学校×企業・NPO・地域

西千葉地域での取り組み



メディアリテラシー教育実践2019 西千葉ショートフィルムズシーズン2

FACE OFF!

場所：千葉大学教育学部2号棟 2111教室
日時：2月7日（日）12:55～上映開始
藤川研究室 エデュテーションフェスタ内にて上映

FACE OFFから始まる、
(リンク)
深夜の氷上で交錯する熱き青春ドラマ!

あらすじ
アイスホッケー部のシュンはエースでありながら、ワンマンプレイを繰り返し、チームメイトと衝突している。試合を目前に控えたある日、シュンはチームを去り、実家である銚子へと帰ってしまう。個性豊かなチームメイト、シュンに想いを寄せる新人マネージャーのサキ、チームのあり方に葛藤するシュン…。それぞれの思いが1つとなり、弱小チームは試合に勝利する事ができるのか!?



西千葉を舞台にした映像制作（小学生、大学生）、小学生による西千葉修学旅行等、西千葉地域で実験的な取り組みを展開。



学校×アーティスト

子どもも教師も常識の枠を越える



京都・宇治市立小倉小学校「ようこそ一流アーティストたち」
NPO法人芸術家と子どもたちによるエイジス授業
劇団衛星による「演劇で算数」「演劇で環境」「演劇で食育」
「演劇で防犯」
NPO法人子どもとアーティストとの出会いによる「ダンスで、理科を学ぼう」



子ども×企業・行政×大学

体験型プログラムに大学生がかかわる



教育学部の授業「キャリア教育演習」では、千葉県のキャリア教育先端技術体験プログラムの参加を前提に、学生が体験先と打合せ、ガイドブックを作成。

さらに同授業では、千葉市・千葉大学連携事業「西千葉子ども起業塾」を企画、実施。

授業「グループリーダー体験実習」では、ベネッセコーポレーション実施（2010年度からは実施主体変更）の異年齢小中学生対象キャンプ「ワンダー体験クラブ」への参加を前提に、事前・事後の学習。

※写真はそれぞれのホームページ等から。

教師×企業・NPO

異業種交流型の研究会



毎月1回「千葉授業づくり研究会」、隔月1回「メディアリテラシー教育研究会」を関係団体とともに定例開催。教育界以外からゲストを招き、授業づくりに活かす。2011年からは「関西授業づくり研究会」も開催。

テーマ例 「音楽の仕事と著作権に関する授業」
「医療機器の開発とのお仕事」「発達障害とメディアの関係について」「ミクシィにおける、青少年が健全利用するための対策について」「教師のためのPR入門」



住民×行政×大学

学んだ成果を社会に還元する

千葉市生涯学習センターで開講の「ちば子ども学講座」の受講者が、「ちば子ども学研究会」を組織し、公民館やセンターとともに新しい講座の企画・運営や子ども対象のイベントを実施する。千葉大学教育学部生涯教育課程の「地域子育て支援活動実習」として、学生も参加。



外部発想で考える授業づくり

「人」への共感から単元を構成する

その問題は、誰にとって切実なのか？

その人の状況を具体的に描写すれば、子どもはその人に共感を抱く（cf. テレビ番組）

フィクションでも、その世界の中で整合性があれば、子どもはその中の人に共感を抱くことが可能
ことから自体に最初から興味をもてなくても、その世界の人に共感を抱けば意欲は高まる

子どもの承認欲求に応える

情報が足りない時代には「知的好奇心」に、承認が足りない時代には「承認欲求」に訴える

同じ問いに複数の子どもが答える（同じ答えなら確からしさが増し、異なる答えなら検討が始まる）

予定調和の授業でなく、子どもが原因となって動く授業へ

一人でできない活動を、集団で行う（○人だからこそできる活動）

大人が子どもに伝えるのではなく、子どもの考えを大人が聴く

身体に依拠した学力へ

不器用では算数はできない

対人コミュニケーションに必要な「身のこなし」

身体を使えば「腑に落ちる」

高度情報社会ゆえに直感が求められる

「できる自分」に変わる力

継続性で培われる「知的体力」

「書くこと」と「読む（音読する）こと」を中心にした学習へ

千葉大附属中「社会とつながる数学」（3年、選択）

ギリシャ時代、数学史、現代での活用

正方形の対角線、無理数と背理法、ピタゴラスと整数、音律と数学、素数と暗号、完全数、三角形の合同と3D技術、複素数と電気工学。

今後は、デザインと数学、犯罪と統計、リスクを考える、鉄道路線図とネットワーク理論等。

「難しい」課題も扱う

一般的な証明が難しい問題は、特殊事例の証明を扱う。

（例 千葉県の地図を塗り分けるのは最低4色という証明）

表計算ソフトを使い、近似値計算を積極的に扱う。

（例 2の12乗根の近似値計算）

多くの具体例からの帰納的問題解決を中心とし、必要に応じて手分けして計算させる。

定義、証明等、教師の板書を写すこともさせる。

読書指導等「授業のサブチャンネル」

読み物としての「授業通信」を毎週配布。

関連する書籍を毎回数冊教室に持ち込む。

